

目次

I	テーマ設定理由	21
II	研究目標	22
III	研究仮説	22
1	基本仮説	22
2	作業仮説	22
IV	研究の全体構想図	23
V	研究内容	24-9
1	新しい学校教育の方向	24
(1)	新学習指導要領の基本方針	24
(2)	国語科における新教育課程の要点	24
2	授業改善の挑戦	25
(1)	授業観	25
(2)	情報教育と教育機器の活用	26
(3)	評価の方法	26
3	地域教材の開発	28
(1)	沖縄語の歴史的歩み	28
(2)	言語と思考	28
(3)	沖縄の文学	29
VI	授業実践	30-38
1	単元名 「地域の文化を学ぶ」	30
2	単元目標	30
3	単元について	30
4	授業仮説	34
5	単元全体計画	34
6	本時の展開	36
VII	結果と考察	38-39
(1)	基本仮説の検証	38
(2)	作業仮説の検証	39
VIII	研究の成果と今後の課題	39-40
1	研究の成果	39
2	今後の課題	40
3	終わりに	40
	＜主な引用文献・参考文献＞	40

生き生きと学ぶ選択教科・国語の授業を目指して

～地域教材の開発を通して～

宜野湾市立嘉数中学校教諭 安里秀子

I テーマ設定理由

現代社会は科学技術の目覚ましい進歩により、国際化・情報化が進展している。このような社会においては、居ながらにして世界の情報が入手でき、空間を越えて世界の人と交流できるようになりボーダレス化している。

しかしその反面、核家族化や少子化等の影響により、人間関係の希薄化、コミュニケーション能力の低下も憂慮されている。物質的な豊かさ、便利さの裏で心の貧しさが指摘され、「心の教育」の重要性が叫ばれている時代でもある。

さらに、自己実現と地球的な規模で取り組むべきさまざまな課題の解決のために、生涯にわたって学ぶという生涯学習体系の社会が提唱され、日本でもそのために教育のパラダイム⁽¹⁾の転換が必要となっている。

このような社会の変化へ対応するために学校や学校教育の在り方が問い直され、平成10年に学習指導要領の改訂が行われたことは周知の通りである。学校完全週五日制、総合的な学習の時間の完全実施、教科内容の削減、基礎・基本の徹底、選択履修幅の拡大等が盛り込まれている。そしてこれからは、地域に開かれた特色ある学校作りをし、学社連携による教育で、子供たちに「生きる力」(生涯学習能力)や豊かな人間性を培っていかうというのである。

国語科でも、生涯にわたって学ぶ基礎力をつけるのために特に、社会生活に必要な言語表現能力・言語理解能力、相手の立

場や考えを尊重して、「伝え合うことのできる力」を育成することが重視されている。

また生徒が意欲的に学べるように、選択教科「国語」において、それぞれの生徒の特性に応じた多様な学習活動の工夫が明記されている。

私たちの住んでいる沖縄には独自の歴史があり、その中で育まれた豊かな言語文化がある。世代から世代へと継承されてきた言語文化であるが、今沖縄の言語文化の基である方言が消滅しようとしている。

先行き不透明といわれる現代社会で、自分らしく生き自己実現するためには、自己のアイデンティティを確立することが重要なことであるが、私たちの祖先が守り、育て、伝えてきた豊かな言語文化を理解することもその要素となるだろう。またそれは、地域人材・人を通して学ぶことにより、より力強いものとなるだろう。ちなみに県の教育施策にも伝統文化の継承が掲げられている。

私自身のこれまでの授業実践では、地域の言語文化については、古典学習の発展教材として「ことわざ」や「琉歌」を扱ってきたが、一部の知識のみに終始し、生の教材や本物に触れさせることが出来なかった。そこで生徒たちが、地域の文化に誇りを感じ生き生きと学べるような、選択教科・国語の授業を実践してみようと考えた。地域人材の活用や問題解決的学習・作品の発表の活動等、授業改善の工夫を通して、生徒が協同で学ぶことの楽しさを味わい、これから先も地域の言語文化に興味・関心を持

(1) パラダイムとは思考の枠組みのこと

続ける意欲や態度の育成を目指して本テーマを設定した。

II 研究目標

選択教科・国語の学習において方言・琉歌・民話などの地域の言語文化について調べる「問題解決的学習」を行い、その過程において地域人材の活用を工夫し、実際に方言を使うという体験活動を取り入れることにより、地域の方言や文化を理解し、尊重し、継承していこうとする態度を養う。

III 研究仮説

1 基本仮説

地域教材を活用した「問題解決的学習」において、自らの興味・関心に応じた課題を設定し、各過程において地域人材の活用を工夫することにより、地域の方の地域文化に対する深い愛情や後輩を育てようという熱い想いに触れ、最後まで意欲を持って学ぶことができるだろう。

2 作業仮説

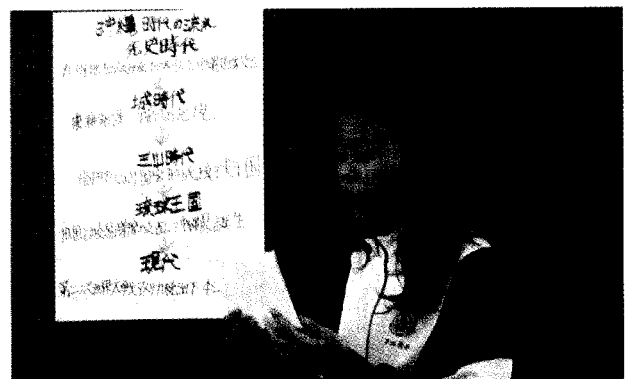
- ①生徒の想いや願いを起点として選択国語の授業を行うことにより、自ら課題を追究し、学ぶことの楽しさを味わうことができるであろう。
- ②調べたことをまとめ発表する過程において、自分なりの表現を工夫することにより、みんなに伝えたいという意欲が喚起できるであろう。
- ③実際に方言を話すという体験を通して、方言に対する理解と方言を大切にしようとする心情や態度を育成することができるであろう。
- ④学習過程をポートフォリオにまとめていくことにより、自分の問題解決の道筋がわかり自己実現を図ることができるとともに、地域文化を尊重し継承していこうとする態度が育成できるであろう。



地域人材玉那覇昇さんの沖縄の歴史講演会



地域人材宮城カツエさんの方言の講演会

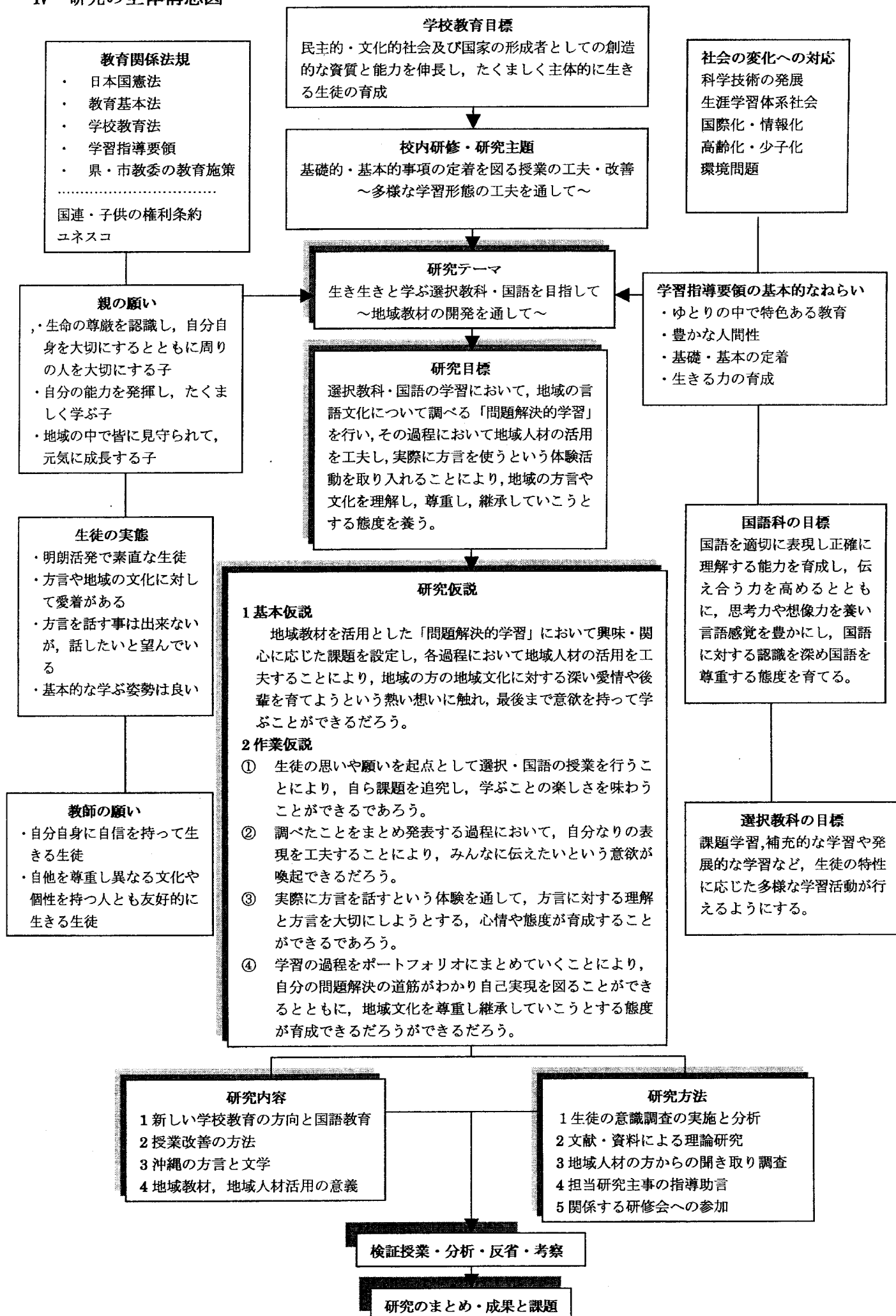


発表の様子 「沖縄の歴史」 澤岬優香さん



「方言の歴史」班

IV 研究の全体構想図



V 研究内容

1 新しい学校教育の方向

(1)新学習指導要領の基本方針

平成7年4月に15期中央教育審議会が発足し、文部大臣から「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」諮問が行われ、それを受けて平成8年7月中央教育審議会第一次答申においてこれからの学校の在り方が提言された。それを受けて平成10年7月教育課程審議会は、これからの教育課程の基準を次の方針に基づき改訂することを提言した。

- ①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。
- ②自ら学び、自ら考える力を育成すること。
- ③ゆとりのある教育活動を展開する中で基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。
- ④各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること。

この方針を基に改訂された新学習指導要領では、授業内容の削減を行い、総合的な学習の時間の位置付け、選択教科の履修幅の拡大、生徒の個性の伸長、基礎・基本を徹底する教育などが実施されることとなった。

(2)国語科における新教育課程の要点

①学習指導要領に示された国語科の目標

国語を適切に表現し正確に理解する力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

②今回の改訂の特徴

新しい教育課程での国語科教育は、現実の社会生活に生かせる実践的言語能力を育成する、言語の学習指導が中核をなして以下のことを重視している。

- お互いの立場や考えを尊重して、言葉で伝え合う能力を育成すること

- 自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力を育成すること
- 目的や場面などに応じて、適切に表現する能力を育成すること
- 目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てること

今回の改訂の特徴は国語科の目標にも示されているように、「表現」の能力の育成を前面に出していることである。このことは従来の文字言語の「理解」を中心にした受信・受容型の国語の学習から、「表現」を中心にした発信・表現型の国語科教育に転換すべきことを明示している。これまでは学習の出発点が、読みから始まっていたが、これからは自分の課題や目的をもって表現するという、発信型の学習指導の工夫・改善が必要になる。

またもうひとつの特徴は、表現の能力と理解の能力の育成を基盤にした言葉で「伝え合う力」の育成を、国語科教育の目標に明確に据えたことにある。つまり、これまで「表現」と「理解」という領域の立て方をしてきたのに対して、「表現」と「理解」とその相互関係としての「伝え合う力」を位置付けているのである。そのことから今回改訂された「話すこと・聞くこと」「書く」「読むこと」「言語事項」という領域の立て方が根拠づけられる。ちなみに「伝え合う力」とは「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力」であり、相互理解を深め、自立・共生しながら、豊かな人間関係を築いてゆくのに大切な能力である。

さらに中央教育審議会第一次答申において「……国語をしっかりと身に付けること、わが国の歴史や文化を学び、それらを大切にすることを培うこと……」といわれているように国語を尊重する態度の重要性が指摘されている。

③選択教科・国語について

今回の改訂で、中学校においては学年段階に応じて漸次選択幅の拡大を図ることになり、選択履修幅を一層拡大した。これにより 1 学年から選択教科としての「国語」の開設が可能となった。その趣旨は、時間的にも精神的にもゆとりのある教育活動が展開される中で、厳選された基礎・基本的な内容を生徒がじっくり学習しその確実な定着を図るとともに、生徒が自分の興味・関心等に応じて選んだ課題に主体的に取り組む、学ぶことの楽しさや成就感を味わうことができるようにすることである。指導要領の中では、次のように示してある。

「選択教科としての『国語』においては、生徒の特性等に応じた多様な学習活動が展開できるよう、第2の内容その他の内容で各学校が定めるものについて、課題学習、表現や理解の能力を補充的に高める学習、発展的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする。」

2 授業改善への挑戦

(1) 授業観

授業に取り組む際前提としたいことは、子ども達は皆「よくなりたい」と願っている存在であるという、村井実氏の児童観⁽²⁾である。学校は学びたい、よくなりたいという願いを持っている。全ての子の学習権を保障する授業を設計しなければならない。

①生徒に向かう教師の姿勢

佐藤学⁽³⁾氏は、教師の生徒に向かう心構えとして次のように述べている。「教室では教師は絶えず子供たちの『声なき声』を、慎重深く聴く身体で子供一人ひとりと対峙する。……(省略)……教師は子供たちに語りかける時も、自分の語りを意識

し言葉を選びながら話しているだけでなく、それと同程度に子どもの「声なき声」を聞くことに意識を集中している。……したがって集団に話しかけるときの、一人ひとりに対して語っているのもあって『みんな』に語りかけてはいない。」教師には、このように子ども一人一人に対応するテーラーリングの姿勢を持つことが重要である。どんな小さな発言であっても、その発言に込められた気持ちやイメージに心を通わせ、「なるほど・おもしろい・すごい」などの情動的な「味わい」をよび起こす「分かり方」で聞きくことが大切である。教室の中で一人一人の子供と心のキャッチボールをするのである。

次に、テーラーリングで引き出された子ども達の多様な考えやイメージを響き合わせるオーケストレーティングと言う活動が重要になってくる。この活動により生徒は、豊かで深い経験をする。教師にはこのように個に対応する活動（テーラーリング）と多様なものを響き合わせるオーケストレーティングという活動が、授業の中で重要となる。

②授業の中心は「学び」

これまでの学力は、知識量で測られていたが、これからの学力は「生きる力」「生涯学習能力」となっている。では、そのような力はどうすれば身に付けることができるのだろうか。佐藤学氏は子どもたちが、「わからないよ。」と援助を求めると、周りの子が優しく教えてあげる人間関係が大切であるという。助け合える人間関係の中で安心して学び、学ぶ力が作り上げられるという。このように助け合って学ぶ学び方を「協同の学び」という。教師は学級のなかにこのような関係を作り出す努力を怠ってはいけない。学びは、個から始まり協同の学びをし、また個に戻るといわれている。

(2) 新潟教育大学教育学部付属岡中学校著「今、生徒が求めている授業とは」,1991.p 9

(3) 佐藤学著「授業を変える・学校が変わる」2000.p 39

佐藤氏はまた、子どもたちが教材やモノと対話し、仲間や教師と対話し、自分自身と対話する学びを、授業の中心に据えることが重要であると述べている。さらに教師は、具体的に作業のある学び、グループ活動のある学び、そして自分のわかり方を作品として表現し、仲間と共有し吟味しあう活動のある学びを、計画・実施することが重要であると述べている。

また、藤岡完治氏は授業設計の方法・授業デザインの構成要素として次の六つを挙げている。

- A 教師の願い、B 教育の目標、
C 学習者の実態、D 教材の研究、
E 教授方法、F 学習環境・条件

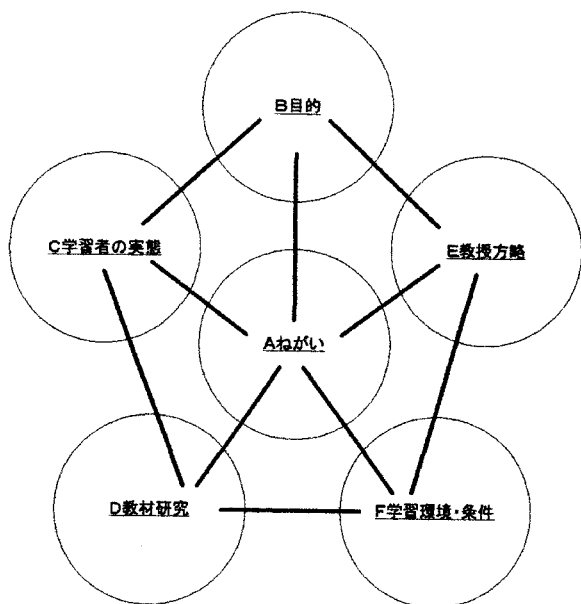


図1 授業デザインの六つの構成要素

これらの六つの構成要素はどれも授業をデザインする際に欠くことのできない要素であり、この六つの視点から授業を見ることが大切である。

(2) 情報教育と教育機器の活用

高度情報通信社会に対応する「生きる力」を育成するためには、情報活用能力の育成が重要である。情報活用能力には、コンピューターやインターネット等の情報手段を自分の課題解決のために用いて調べる力、また創造した情報を発信する力、空間

を超えてコミュニケーションする能力などが大切である。

しかし、コンピューターやインターネットを活用しての調べ学習は、生徒の学習意欲を高め楽しく学ぶことができる反面、基本的な操作の指導やトラブルへの対応、さらには限られた時間内で必要な情報にたどり着くことの困難が予想されるので、予め沖縄情報のリンク集を作成しておくなどの教師の支援も必要になってくる。

さらに、教育機器を活用する事により瞬間的・即時的であるという音声言語の欠点を補うことができ、さらにはメディアに記録を残すことにより確かな評価に活用することも出来るであろう。

情報活用能力と言うとコンピューターリテラシーだけを考えがちであるが、図書資料・また人から取り入れる力でもある。つまり、自分の目的に合わせて広い範囲から情報を集め、活用する能力のことである。

(3) 評価の方法

教育課程審議会の2000年12月の答申で「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価のあり方について」で、これからの児童生徒の学習の評価について基本的な考え方が示された。それは次のようである。

- ① 学力は知識の量のみで評価するのではなく、自ら学び自ら考える「生きる力」が育まれているかで評価
- ② 絶対評価を重視し、生徒一人一人の良い点や可能性、進歩の状況などを評価するため、個人内評価を工夫する。
- ③ 日常的に児童生徒や保護者に学習の評価を十分に説明していくことが大切である。
- ④ 児童生徒の成長の状況を総合的に評価することが重要である。
- ⑤ 各教職員が評価について専門的力量を高めるように、自己研鑽に努めたり、校内研究・研修を実施することが重要で

ある。

このような考え方をもとにこれからの評価方法を考えてみた。

「指導と評価は一体である」といわれるが、「問題解決的な学習」の教授プロセスを評価する際に最も有効な評価方法として「ポートフォリオ」が考えられる。「ポートフォリオ」とは「紙ばさみ」という意味であるが、一人の人間が生み出した大切な「歴」を一元化して綴って置くものである。つまり、作文や返されたテスト、描いた絵、レポート、図面や提出したスケッチなどを自分の歴史として残しておくものである。そのポートフォリオを問題解決的な学習に用い、生徒の学習支援と評価を行い、生徒に確実なる力と自信を付けたい。

鈴木敏恵⁽⁴⁾氏はポートフォリオの「対象」や「観点」として次の四つをあげている。

①学習成果ファイル

テーマに沿った学習成果を一元的に「ファイル」したモノ。

②対話／エントリースリップ

学習成果ファイルを前にして、「できるようになったこと」「身に付けたい力」「大切な発見（への視力）」を学習者と教師と「対話」しながら、一枚の紙に箇条書きにしていく。

③再構築

学習成果ファイルのうち重要な発見や気づきを改めて改訂、編集し、凝縮して新しく「レポート」や「紙芝居」「マルチメディア作品」あるいは「ドラマ」「ダンス&作曲」・・・などにするプロセス。

④プレゼンテーション

マルチメディア作品や紙芝居などによる「プレゼンテーション」を評価する。

鈴木氏は教師のアイディアや工夫によりこれらのバリエーションは無限だと述べている。

また、教育における「ポートフォリオの概要」として以下のように述べている。

①「結果」のみでなく、「学習プロセス」を重視する評価である。

②問題解決能力、コミュニケーション能力、表現力など（従来のテストで計れない力）に適すると言われている評価法である。

③「自己評価、オープン評価」が前提となる。

④学び手自身の視点に立った課題提出が可能となる。

⑤学び手自身が学習デザインを認識することができる。

⑥教師も学習者も「評価観点」を共有することができる。

⑦点数刻みではない、その子の学習や成長した力が表れ、「何か」見いだせ伝わるモノ。

⑧学習者が自らの学習のフィードバックから自分のコアコンピテンス（自分はこれだ！という強みになる能力、センス、スキル）になるであろう特性に気づくモノ。

⑨「自己確認された成長の軌跡」、「成長前」「成長後」が見えることの有効性を持つモノ。

次に、ポートフォリオのについて二つの種類をあげて説明している。

①「課題ポートフォリオ」

その特定の「テーマや研究」を凝縮したもの。

②「個人ポートフォリオ」

その人のコアコンピテンスや活動やポリシーが凝縮されたもの。

最後に課題ポートフォリオの利点についてまとめたいと思う。

(4) 鈴木敏恵著「未来教育に“ポートフォリオ”を生かす」2000, p 17.

◎課題学習の際自分の書いた作文や撮影した写真・取材した時のメモなどを残しておき、それからいろいろな思考を組み立てたり、発見をしたり気づきを得たりする。

◎自分の成長を見て自信を得る。(プラスの自己評価ができる)

◎教師が生徒のポートフォリオを見ながらその過程過程の途中で、その子の取り組みを評価したり励ましたりできる。

◎教師が生徒一人一人の課題を知る事ができ、そのことについて対話する事ができる。

◎評価が目に見えるものになり生徒の良さが評価できる。

3 地域教材の開発

(1) 沖縄語の歴史的歩み⁽⁵⁾

沖縄語は大和語と基は一にしているが、地理的条件によって独自の歩みをし、独特の言語を形成してきている。薩摩の侵攻以降、琉球王国は薩摩の属国とされたが、言語を含め独自の文化は、発展こそすれ衰退することはなかった。廃藩置県以降は沖縄語撲滅運動と合わせて皇民化教育が実施されたが、それは公式の場や教育現場などに限られたもので、ごく一部を除く社会のあらゆる階層・地域で日常語は沖縄語であった。しかし戦後、米軍の統治下に置かれ日本復帰を果たすために、沖縄側から沖縄語撲滅運動を進めることになり、沖縄語は消滅の方向に向かっている。

復帰後は沖縄側の努力もあって、独自の文化の見直し、保存、継承が極めて盛んであるものの、沖縄語については世代の交代も進み、家族の中でも祖父母が話すくらいで、次世代への継承は途切れている状態である。地域や保存会が「方言講座」

「島言葉弁論大会」などを催し、沖縄語の良さをアピールし、若い世代に継承させようという取り組みもなされてきている。

(2) 言語と思考

子どもの思考の発達において、言葉が本質的に重要な働きをもっていることは周知のとおりであるが、日常のその時々の問題解決や事象を見るときの見方について考える場合に大きな示唆を与えるのが、古典的な見解の一つである言語相対性仮説 (linguistic relativity hypothesis) とか、サピア・ウォーフ仮説 (Sapir-Whorf hypothesis) と呼ばれるものであろう。この考え方によると、われわれが事象を見る見方は、事象の性質よりも、むしろ、われわれが知っている言葉の示すカテゴリーに支配されており、したがって、ちがう言葉をもつ二人、ちがう言語圏に住む二人は、物理的に同一の事象を体験しても、それぞれ、ちがった事象体験をするといわれる。つまり、異なることばをもつ人々は同じ世界に対して、単に異なる名前をつけて住んでいるというのではなく、異なる言葉を通して異なる世界を見ているのである。このことから、標準語と方言では同じものを表現してもその意味世界は違うということであり、方言で表現する微妙なニュアンスを完全に標準語で表現する事は難しい。

さらに、地域のお年よりの方から学ぶ「ジンプン」は生きて働く生活の知恵であり、学ぶことも多いと考える。また、沖縄への想いや沖縄戦の体験談、戦後の「復帰運動の頃」の方言撲滅運動等のエピソードは生の地域の歴史に触れることになり、郷土文化（琉球文化）について考えるきっかけとなるだろう。また方言と共通語はもとは同じだったことが万葉集の言葉と方言の比較からも理解でき、沖縄の方言は言語学上も大変貴重なものであることが分かるだろう。

(5) 吉屋松金著「実践うちなあぐち教本」南語出版, 1999, p.1.

(3) 沖縄の文学

沖縄には「おもろそうし」「琉歌」「組踊り」などの古典文学、伝説や民話などの伝承作品など、数多くの優れた文学作品が残されている。また各地域に独特な歌謡やことわざなどなども残されている。それらの文学は豊かな島人たちの心を伝えている。

① ことわざ

沖縄のことわざには、標準語のことわざと似た意味を表すものもあるが、言い回しが独特でまるでおじいちゃんやおばあちゃんがすぐそこにいて、教えてくれているような優しい雰囲気を持つものが多い。

<例1>

あわれいる中^{なか}落ち着^あき(急がば回れ)

言い様ぬあれえ聞^きち様んあん

(物も言い様で角が立つ)

慶良間^{きらま}や見^みしが睫毛^{まつげ}や見^みいらん

(灯台もと暗し)

命^{いのち}どう宝(命あつての物種)

② 琉歌

琉歌は「8・8・8・6」の短歌形式がよく知られている。「てんさぐぬ花」や「花ぬ風車^{かじまや}」など童謡として歌われ、慣れ親しまれた琉歌もある。「かぎやで風」などの舞踊曲の歌詞や有名な作者・恩納なびいや吉屋ちる一の歌などに触れさせ昔の沖縄の社会やその時代の人々の感情などについて想像させたい。

<例2>

ていんさぐぬ花や爪^{つま}先^{さき}に染みてい

親^{うや}ぬ寄^よしぐとうや肝^きに染みり

天^{てん}ぬ群^{ぐん}星^{せい}や読^よみば読^よまりゆい

親^{うや}ぬ寄^よしぐとうや読^よみぬならん

夜^{よる}走^はらす船^{ふね}や北^{きた}ぬ方^{ほう}星^{せい}目^め当てい

我^わ産^うちえる親^{うや}や我^わどう目^め当てい

これらの琉歌は、「ていんさぐぬ花」の歌で親しまれているが、この歌詞に含まれた意味は深く、現代の親子関係に教訓にな

るものがある。特に子供が親の愛情を胸にしっかり受け止め、自分の成長こそが親の目標であると自覚しているところに親子関係の絆の深さが感じられる。琉歌の中には教訓になる歌がたくさんあり、それらを学ぶことで人生の宝を得、逆境の中でも心の支えとなるだろう。

③ 地域人材の活用

これからの学校教育は地域との連携によって営まれてゆくことが、新しい教育の方向として示された。子供は学校のなかだけで、学校の先生の力だけで教育することはできない。地域・社会との連携によって生まれる大きな力で育てていこうというのである。学校の先生も授業において自分の専門でないことについては、地域社会の専門の詳しい人を活用し子供に本物の知識を知恵を授けていこうというのである。そして教師も子供とともに学び、教師としての力量をあげていこうとするものである。教室も学校も地域に開いてゆくということである。

特に、地域の歴史や文化を媒体として触れ合いを持つことは、生徒にも地域の人にも温かい感情が生まれる。このように人との温かい交流を通して学んだことは、本物の生きた知識となり、子どもたちの心に文化を守り、継承していこうとする意欲や態度が育成できるであろうと期待できる。また、ゲストティチャーとして活用される地域の人材にとっても生涯学習の機会にもなる。またその生き方は、貴重な生きた教材でもあり同時に、現代の教育課題を解決することに有効な手段であると考ええる。

VI授業実践

第3学年 選択国語科学習支援案

2001年7月12日(木)5校時

宜野湾市立嘉数中学校

第3年選択国語Aクラス

男子7名、女子31名、計38名

授業者 安里秀子

1 単元名 「地域の言語文化を学ぶ」

2 単元目標

郷土の言語文化の豊かな世界に触れることにより、地域文化に興味・関心を持ち大切にしていこうとする心情を育てる。

3 単元について

(1)教材観

現代社会は「飽食の時代」といわれ、モノは豊かになった反面心の貧しさが指摘されている。また地域共同体の崩壊から少子化、核家族化が進み人間関係の希薄化も憂慮されている。このような社会状況の中で、学校と地域の連携による学校教育の再生、地域の教育力の向上への取り組みがおこなわれている。

このことからかけがえのない地域文化について、地域の古老から直に学ぶことは貴重な体験となる。沖縄には地域の言語文化が豊かにあり、生徒も方言に対して興味・関心を持っており、方言を話してみたいという願望も強い。目新しい外の世界に目を向けることも大切であるが、まず自分の住む地域の文化に目を向けさせ、地域文化を学ぶことは、地域の貴重な人材の本物のこだわりや想い、生き方に触れることであり、自己のアイデンティティ形成にとってとても大切なことであると考え。また自己実現への大きな原動力にもなる。悠久の歴史のなかで培われてきた沖縄の「チムグクル」を共通語では表現できないニュアンスで伝える唯一の言葉「方言」、昔から沖縄の人々が親しみ三味線にのせて歌い感情表現してきた「民謡や琉歌」また親から子へ

と語り継がれて、ウチナンチュの心を癒してくれる「民話」、昔の心豊かな生活の中から生まれた、人生を生き抜く知恵の言葉「ことわざ」等の地域言語文化の中には先人の知恵が隠されている。その言語文化に触れることで沖縄の豊かな文化を理解し、かけがえのない地域文化に気づき、郷土への深い愛着を感じる事ができるだろうと考える。またウチナンチュとしてのアイデンティティが育ち、方言をコミュニケーションの手段として活用していけるようになる。と考える。

(2)児童観

①学校生活の様子から

明るく活発で文科系・スポーツ系の部活動や生徒会活動などに取り組み、前向きに学校生活を送っている生徒が多い。また国語の教科に対しても積極的に「漢字検定を受けるための勉強をしたい。」「受験対策の勉強を早めにしたい。」という気持ちを持ってこの選択教科を選んでいる。さらに学校の勉強・部活以外にもピアノ・琉舞・三線・書道等の趣味や教養に対する興味・関心の高い生徒も数名いる。

②地域文化に対するアンケートの結果より

生徒は日常生活で方言に触れる機会があり、方言を学びたいという願いを持っている。ちなみに生徒は、沖縄の文化に対して好感度が高く、三線の音色や「カチャーシ」「エイサー」に対しては、半数以上の生徒が好きと答えており、地域文化に対する愛着が見られる。特に近年芸能界で沖縄出身のタレントが活躍したり、沖縄をテーマにした連続ドラマ番組、映画等があり、生徒が地域の特色を優位性で見る機会が増えてきていることも、沖縄文化の再発見につながっている。

●地域文化に対する意識調査の結果と考察
調査目的：生徒の地域文化や地域との関わりに対する意識調査

(1)調査対象：嘉数中学校3年選択国語 A クラス（男子6名，女子32名，計37名）

(2)調査期日：2001年5月31日(木)

(3)調査方法：質問紙法

(4)結果と考察

①沖縄について愛着度

図Ⅰ-1に示されているように「沖縄は好きですか」の問いに、89%の生徒が「好きだ」と答えている。「嫌い」という生徒は一人も無く、どちらとも言えないという生徒が11%いる。「好きな理由は何か」という問いに対しては、「海や空などの自然が美しい」「気候が過ごしやすい」「食べ物がおいしい」というような自然・風物の良さを挙げる答えと共に「周りの人が優しく家族的で、人間関係がいい」「おじいちゃんやおばあちゃんがおもしろい」「地域の文化がいい」というような沖縄人々の人情味溢れる所やエイサーやカチャーシーなどの沖縄独特の文化を理由にあげる生徒もいて、沖縄に対する愛着が強い事が分かる。「どちらともいえない」と答えた生徒の挙げた理由は「雪が降らない」「県が小さい」「ビルや電車が無い」というようなものだった。普段「沖縄らしさを感じるか」という問いに対しても97%の生徒が「感じる」と答え、どんな時に感じるかという問いに対しては、「言葉のなまりや方言を聞く時」そして「自分自身も方言を使う時」と、言葉に沖縄らしさを感じていることが分かる。

②地域文化に対する好感度

図Ⅲに示されているように「地域文化の中から十項目についてどのように感じているか」を「好き」か「どちらとも言えないもの」か「嫌い」に分類してもらったと、皆好きな生徒が5%いる。また嫌いなものがない生徒が70%いて地域文化に親しんでいることがわかる。「嫌い」という答えはほとんど無く、特に「三線の音色を聞くこ

と」は80%の生徒が好きと答えている。次に好感度が高いのは「エイサー」で、その理由として考えられることは、これは地域行事の中で親しんできたこともあるが、保育園や小学校・中学校の運動会や学芸会・学習発表会等の学校行事の中で、実際に演じた経験が考えられる。また「方言」に対しても70%の生徒が「好き」と答えており、小さい頃から慣れ親しんでいるカチャーシーやエイサーと同じくらい親しんでいることがわかる。このことから生徒は身近にある地域文化に対してはかなり好感を持っている。ちなみに最近沖縄の文化が全国的にも話題にされ注目を浴びる事が多くなり、芸能界でも県出身タレントの活躍が目立っている。また沖縄が舞台となったドラマの影響もあり、マスコミを通して沖縄の良さを再認識する機会も多くなっていることも理由の一つに挙げられる。

③方言に対する思い

図Ⅳ-1を見て分かるように生徒の方言に対するイメージは、「楽しそう」「いい感じ」というイメージを持っているとともに「難しい」という印象も持っている。前の集計で「自分自身も方言を使っている時沖縄らしさを実感する」とあるように生徒たちは、自分も方言を使っているという認識がある。しかし彼らのよく使っている方言は、図Ⅳ-2に示されているように「アガー」「デージ」「〇〇ジラー」のような感動詞や接尾語などや「イキガ」「イナグ」「ウチナー」のような簡単な名詞などが標準語の中に一語づつ入り込むだけで、一文や会話文として使われる事はないようである。しかし、図Ⅳ-3にあるように「方言をきちんと学びたいか」の問いに対して84%の生徒が「学びたい」と答えている。その理由は家族の中では祖父母と父母の会話に方言が使われる事があり、生徒はその会話を理解したい、祖父母と方言で会話したい、祖父母の方言をわかりたいと望んでいる。

またその「方言を誰から習いたいかな」という問については「家族・祖父母」から習いたいと答えておりほのぼのとした家族愛が感じられる。

④短歌と琉歌

「短歌について知っていますか」という問に対して 71%の生徒が知っていると答えている。短歌については小学校と中学2年生で既習に学習している。琉歌に対しては 51%の生徒が「知っている」と答えているが「あなたの知っている琉歌を書きなさい」という問に対して「ミルクムナリ」とか「島歌」と書いている生徒もいて琉歌形式等については知らないでただ沖縄らしい歌を琉歌と思い込んでいるようである。

⑤日本の歴史と沖縄の歴史についての認識

歴史的事項については、沖縄の出来事と日本史の中の出来事とどれだけ知識の差があるか見てみると、図VI-1に見るように琉球史の中の「琉球王国」「沖縄戦」「沖縄の日本復帰」などについては「良く知っている」と答えている生徒が 70%以上いて「沖縄戦」については平和教育の充実から 80%を超えている。それに対して聞いた事もない事で 50%を占めていることが「港川人骨」と「琉球処分」で、琉球処分と関連の深い「明治維新」については「よく知らないが聞いたことはある」が 50%を占めている。「明治維新」についてはどの教科書にも載っていて小学校でも中学校でも習っている。沖縄が世界に雄飛した「琉球王国時代」の事は、その時代に栄えた琉球文化は現在目にする機会が多いが琉球王国が滅亡することになった「島津の侵略」や「琉球処分」についてはあまり知られていないようである。

⑥沖縄の歴史や地域の文化についての学習意欲

図VI-2に見るように「沖縄の文化や歴史について知る事は、あなたにとって必要だと思いますか?」という問いに対して

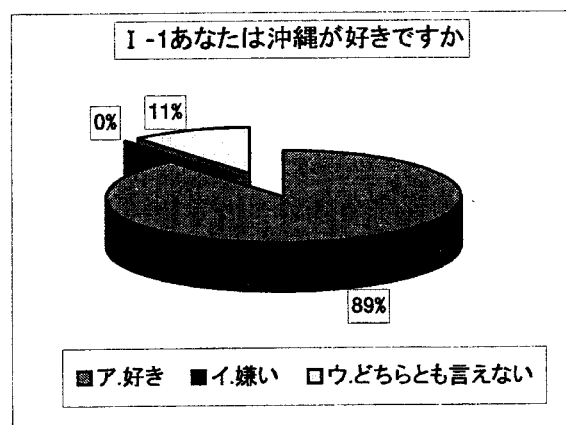
68%の生徒が「はい」と答えている。「いいえ」という答えは一人もいない。「必要と思う理由は何かな」という問いに対しては「自分の出身地だから」「他の地域や海外の人との交流の場できちんと話せるように」「次世代に伝えるために」というしっかりした考えをもっている。また 32%の生徒は「必要かどうか分からない」と考えている。

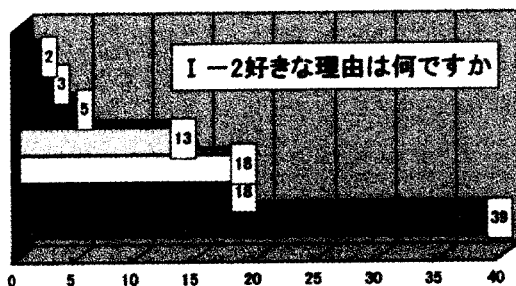
⑦地域の人との交流

生徒の地域に対する意識は図VII-1に見られるように「良く知っている人がいて話したりする人がいる」が 27%いる。また「あいさつする」と答えている生徒も 65%いて、合わせて 92%の生徒が地域の人とのかかわりは強いように思われる。残りの 8%は「知っていても恥ずかしくてあいさつしない」と答えている。「知っている人は一人もいない」という答えは無く、皆が地域にそれぞれ知っている人がいるという結果が見られた。また「これから地域の人とどのように関わりたいかな」という問いに対しては「もっといろいろ話したり、話を聞いたりしたい」という答えが 47%、「これからもあいさつ程度でいい」と答えている生徒が 53%おり、地域の人との交流を望んでいる。

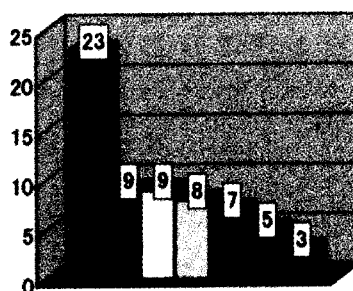
⑧これから生徒の学びたいこと

図VIIIにあるように生徒がこれから一番学びたい事は「方言」が 64%、「沖縄のことわざ」が 14%、「民話」、11%、「琉歌」、8%となっている。





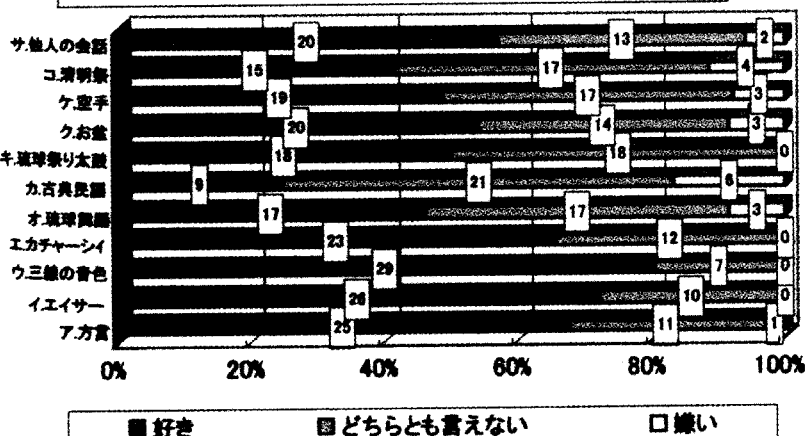
- ☐ A. 海や空などの自然がいい
☐ B. 皆が家族的で人間関係が良い
☐ C. 気候が良くて過ごしやすい
☐ D. 自分の生まれた所だから
☐ E. 食べ物おいしい
☐ F. 観光施設があるからいい
☐ G. 地域文化や方言がいい
☐ H. きれいな自然を見るとき
☐ I. 行事に参加するとき



- ☐ A. なまりや方言を聞くとき
☐ B. 自分も方言を話すとき
☐ C. 暑いとき
☐ D. 沖縄料理を食べるとき
☐ E. きれいな自然を見るとき
☐ F. カチャーシーやエイサーなどを見るとき
☐ G. 行事に参加するとき

II-2あなたはどんな時沖縄を感じますか。

Ⅲ次の事柄について好きなもの、どちらともいえないもの、嫌いなものに分類しなさい

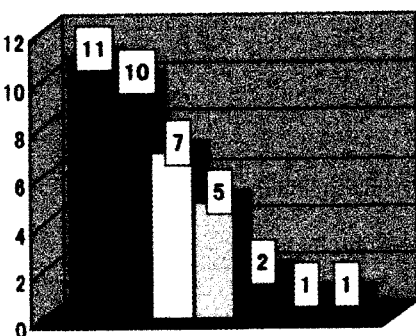


IV-3あなたは方言を少しでも習いたいですか



- ☐ A. はい
☐ B. いいえ

IV-4方言を習いたい理由は何ですか



- ☐ A. 自分の地域の方言を少しでもきちゃんと話したい
☐ B. 方言を話せると楽しそう
☐ C. 祖父母と方言で話したい
☐ D. 祖父母と家族の話を聞き取れるようにしたい
☐ E. 方言をなくしたくない

VI-2沖縄の歴史や文化について知る事はあなたにとって必要だと思いますか。



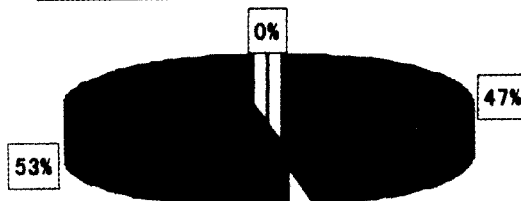
- ☐ A. はい
☐ B. いいえ
☐ C. どちらともいえない

VI-2沖縄の歴史や文化について知る事はあなたにとって必要だと思いますか。



- ☐ A. はい
☐ B. いいえ
☐ C. どちらともいえない

Ⅶ-2これからあなたは地域の人とどのように関わりたいですか。



- ☐ A. もっといろいろ話をしたり話を聞いたりしたい
☐ B. あいさつ程度でいい
☐ C. 関わりたくない

(3)指導観

問題解決学習に取り組む際に地域人材を活用することは、地域の人々や身近な人々とのコミュニケーションの不足している生徒たちにとっては、とても有効な方法であると考えられる。特に、地域の歴史や言語文化に詳しい人材を、ゲストティーチャーとして招き話を聞くことにより、生徒の学習意欲は高まり最後まで粘り強く課題を追究することができる。また人間関係が希薄化している現代社会において、直に地域の方との触れ合いを通して学ぶ授業形態は、「心の教育」としてこれから益々必要になってくるだろう。

また、パソコンやインターネットを調べ学習で活用したり、まとめや発表でパワーポイントを活用することにより、生徒の情報活用能力の育成を図りたい。さらに学校の図書室や市立図書館から沖縄関係の本をまとめて借りておき、いつでも調べられるようにする。

調べたことを、よりわかりやすく伝えるための表現方法も工夫させ、生徒のプレゼンテーション能力も高めたいと考える。生徒の得意な方法で楽しく発表することで、一人一人が多様な能力を持っていることに気づき自信が高まることも期待したい。表現方法として、紙芝居やコント・琉舞・琉歌の謡・三線演奏・パワーポイントも。取り入れたいと考える。さらに、評価の工夫としては、生徒の問題解決の過程をポートフォリオにし、生徒の活動の様子や成長の過程が確認できるようにし、また生徒自身が自己評価や自己確認ができるようにし、学習意欲を高めるような支援ができるようにしたいと考えている。

4 授業仮説

- ①生徒の興味・関心に応じて学習課題を設定することにより、生徒は意欲的に取り組み最後までやり遂げることができるだ

ろう。

- ②学習課題に応じてゲストティーチャーを活用することにより、生徒は安心して学習に取り組むことができるだろう。
- ③調べたことをまとめたり発表するとき、グループに応じて表現方法を選択させることにより、楽しく発表することができるだろう。
- ④ポートフォリオを活用することにより、生徒の一人一人の学習過程を捉えた評価が出来るだろう。

5 単元全体計画

<第1次>単元のオリエンテーション

- ①単元の学習計画とその進め方について
- ②ポートフォリオについて作成の意義と方法について
- ③沖縄関係のリンク集の開き方について

<第2次>学習課題作り

- ④地域人材による沖縄の文化講演会
「沖縄の歴史」……玉那覇昇氏
「沖縄の文化と方言」……宮城カツエ氏
- ⑤学習課題作りと班編成

<第3次>調べ学習

- ⑥調べ学習……図書資料から、インターネットの利用

<第4次>学習成果発表会

- ⑦調べたことを級友に伝える……(本時)

第5次 単元のまとめ

- ⑧他の班の発表を聞いた感想や、自分の学習の取り組みを振り返り感想をまとめる。

各班工夫して協力しての発表



方言ニュース班 ちゅうや 嘉数中
方言ニュース うんぬきやびら…

単元全体計画	選択国語学習支援「方言を話そう」	2001年6月7日～7月12日 実施学年・・・3年選択国語Aクラス	男子6人、女子32人、合計38人
教師の支援	◎ 単元のオリエンテーションをして学習の流れ・取り組み方について知らせる ◎ GT(地域人材)の講演を聴かせやる気を喚起する	◎ 一人一人の問題意識・発想が生かされるような課題が作れるようにする	◎ 情報活用能力が高まるよう支援する ◎ 地域の方に依頼する時のマナー等指導する
学習の流れ 学習内容 学習活動 Step1 気づく 知的好奇心をくすぐり興味・関心を高める Step2 見通す 問題解決のためのコンピテンスを高める Step3 追究する 自らの課題の解決に取り組む 学び方を学ぶ Step4 広げる 深める みんなの発表を聞き、さらに自分の考えや認識を広げる	単元のオリエンテーション 学習計画と取り組み方について ○ ポートフォリオの作成 ○ 課題解決学習 ○ アンケート 地域の人材による講演会 Step 1 テーマ 沖縄の歴史と文化 ～今の私たちを作った偉大なもの～ 沖縄の歴史 方言について 玉那覇昇さん 宮城カツエさん 作文する ① 地域人材の方の地域の文化や歴史に対する思いをとらえる。 ② 地域の人材の方から学んでわかったことについてまとめる。 ③ 感想をまとめる。	学習課題を作ろう Step2 方言で話せるようにするにはどうしたらいいのだろう？ 方言 琉舞をやっているけど歌詞の意味が知りたいな！ 琉歌 学習課題 地域の言語に興味を持ち、自分の調べたいこと、体験したいことをもとに学習テーマを作る。 民話を話したいな！ 民話 昔の人の考えはどんなだったのかな？ことわざで調べてみようかな！ ことわざ 各自のテーマを出し合いウェビングしてグループを作る グループで話し合う 1 調べる方法 (本・地域人材 コンピューター) 2 まとめる方(表現方法)	Step3 調べる コンピューターURL・本・地域人材の方から聞き取り調査 まとめる 調べたことを表に書く 発表会 Step4 発表 ○ 皆で力を合わせて、楽しい発表をする！ ○ 級友の発表から学ぶ！
教師の支援	◎ アンケートから生徒個人の興味のあるところなどデータとして持っておきアドバイスする	◎ 図書館からの資料の借り出し ◎ 調べ学習用のリンク集作成	◎ 効果的な表現ができるよう支援する

6 本時の展開 (7 / 12)

(1)活動名「地域の言語文化について調べたことを発表しよう」

(2)本時のねらい

①調べたことを、自分たちの考え工夫した表現方法でわかりやすく伝え、これまでの取り組みの成果をみんなで確認する。

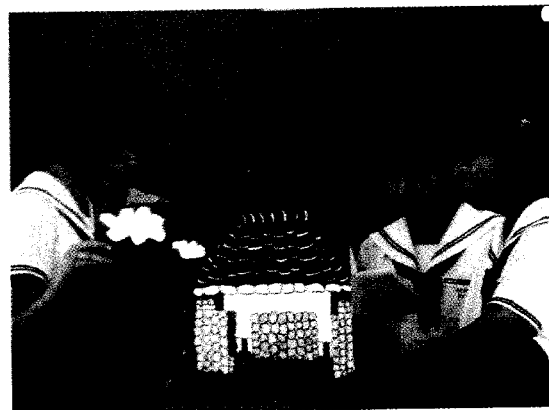
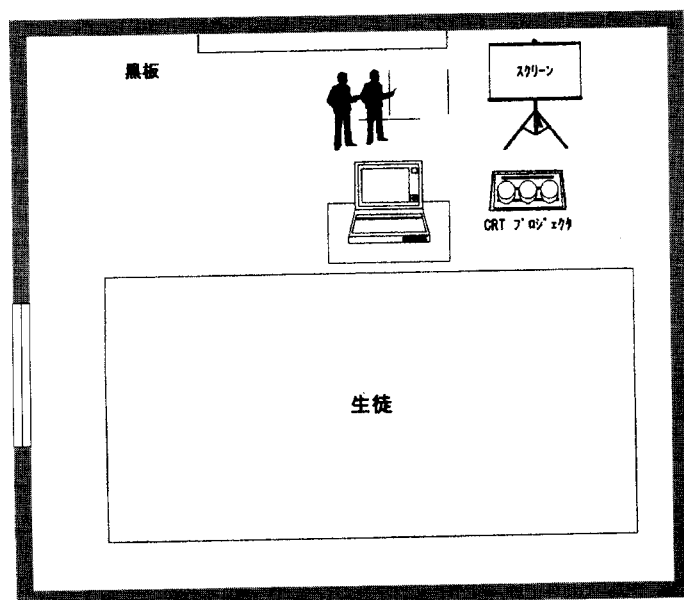
②他の班の発表を聴き自分たちの知らなかった言語文化や各班の表現の方法から学び理解を深める。

(3)本時の作業仮説

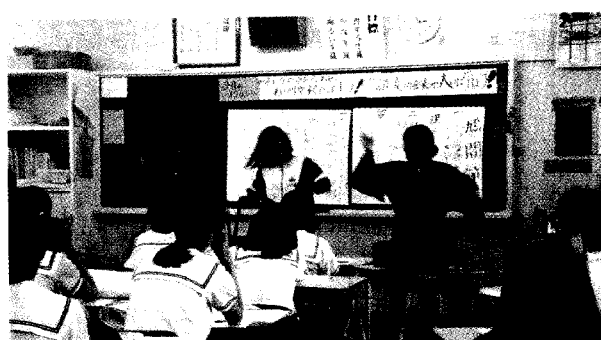
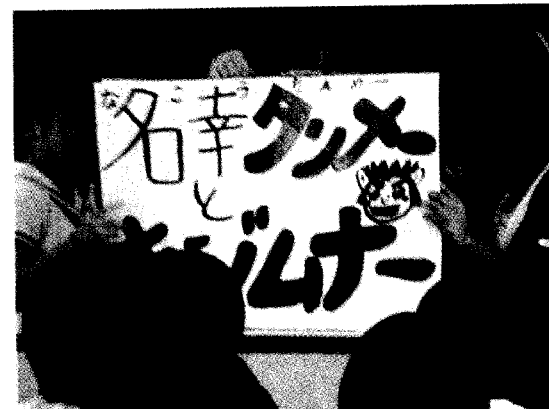
①グループで協力して調べたことをそれぞれ各班員の特徴を生かして、発表することにより、伝える喜びと達成感を味わうことができるだろう。

②各班のそれぞれ異なった課題・異なった表現方法による発表を聞くことにより、沖縄の言語文化についていろいろなこと知り、興味・関心を高めることができるだろう。

(4)場の設定



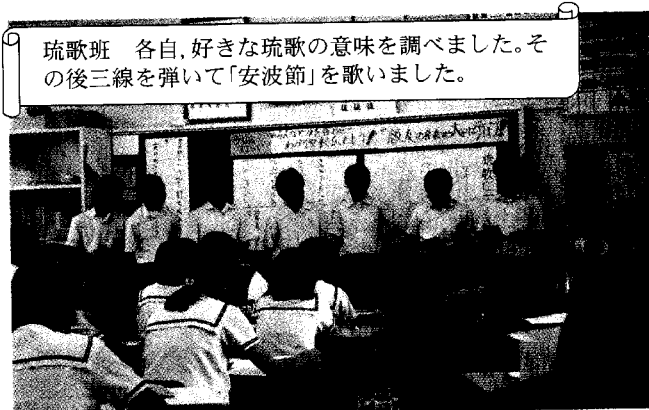
民話の紙芝居、二班「トーチカ祝いぬ始まい」班(ナレーションは共通語で、会話の部分は感情こめて方言でおこなった。)一名幸タンメーとうキジムナ」班はすべて方言で実演した。



日頃、琉舞を習っている私たちは、「鳩間節」の歌詞の意味を調べ、踊りも披露しました。



恩納岳あがた さとうが生まれ島森
んうしぬきて…(大胆なびいの歌
の連ねにも挑戦した佐和子さん)



琉歌班 各自、好きな琉歌の意味を調べました。その後三線を弾いて「安波節」を歌いました。



ことわざ班
生まれ島ぬ
忘れねー
国失ねーん

(5)展開（８時間目・５０分）

流れ	学習活動・内容		教師の支援																															
めあての確認 発表 評価 まとめ	○挨拶・出席確認 1 学習のめあてを確認する ＜めあて＞ ・みんなで力を合わせてわかりやすく伝えよう・楽しい発表にしよう・級友の発表から大いに学ぼう 2 まとめたことを発表しよう		○これまでの学習を振り返り発表への意欲づけを行う ○学習の流れを確認する ○発表者の近くに待機し器械操作等の支援を行う ○他のグループ発表の工夫をしっかりとらえつつ聴かせる ○他の発表を聴きながらメモが取れるように各班のメモ用紙を準備する ○終わったら、次のグループの紹介をする																															
		<table><tr><td></td><td>グループ名</td><td>発表方法</td></tr><tr><td>1</td><td>沖縄の歴史</td><td>図表</td></tr><tr><td>2</td><td>方言の歴史</td><td>パソコン</td></tr><tr><td>3</td><td>方言ニュース</td><td>ショートコント</td></tr><tr><td>4</td><td>ことわざ</td><td>フラッシュカード</td></tr><tr><td>5</td><td>民話一トーチカぬ由来</td><td>紙芝居</td></tr><tr><td>6</td><td>民話一名幸タンメーとキジムナー</td><td>紙芝居</td></tr><tr><td>7</td><td>琉舞の歌詞の意味 一鳩間節一</td><td>掲示カード 踊り</td></tr><tr><td>8</td><td>琉歌一恩納ナビイ</td><td>掲示カード</td></tr><tr><td>9</td><td>琉歌</td><td>掲示カード・歌</td></tr></table>		グループ名	発表方法	1	沖縄の歴史	図表	2	方言の歴史	パソコン	3	方言ニュース	ショートコント	4	ことわざ	フラッシュカード	5	民話一トーチカぬ由来	紙芝居	6	民話一名幸タンメーとキジムナー	紙芝居	7	琉舞の歌詞の意味 一鳩間節一	掲示カード 踊り	8	琉歌一恩納ナビイ	掲示カード	9	琉歌	掲示カード・歌		○感想を書くための用紙を準備する ○評価カードを準備 ○これまでお世話になった地域の方に感謝させる ○宮城さんへの感謝の言葉 ○短い期間でがんばったことを評価する ○これからも地域の方や文化に興味・関心を持って意欲的に取り組むようにうながす
		グループ名	発表方法																															
	1	沖縄の歴史	図表																															
	2	方言の歴史	パソコン																															
	3	方言ニュース	ショートコント																															
	4	ことわざ	フラッシュカード																															
	5	民話一トーチカぬ由来	紙芝居																															
	6	民話一名幸タンメーとキジムナー	紙芝居																															
	7	琉舞の歌詞の意味 一鳩間節一	掲示カード 踊り																															
	8	琉歌一恩納ナビイ	掲示カード																															
	9	琉歌	掲示カード・歌																															
3 級友の発表を聴き、良かった点や気付いたことなどについて感想を書く。 4 これまでの学習や今日の発表を振り返り自己評価をする。 5 教師のまとめ ○夏休みなどを利用し、地域の方やお年寄りから聴いたりして、方言や文化について学んでゆこう ○自分ができるところを探してみよう。																																		

(6)準備する物

コンピューター，デジタルカメラ，液晶プロジェクター，移動式スクリーン，テーブルレコーダー，自己評価カード，感想カード

(7)評価

- 自分の調べたことや伝えたいことを工夫して，しっかり発表することができたか。
- 班員と協力して最後まで取り組み，級友に伝えることができたか。
- 級友の発表を真剣に聞き，地域の言語文化について興味・関心を持つことができたか。

(8) 授業の反省

<良かった点>

○短い時間の調べ学習で自らの問題を解決し、発表のための方言の練習・紙芝居作り・三線の練習と一生懸命取り組んでいた。

○インターネットを活用した調べ学習に意欲的に取り組み、最後のまとめまで自分の力でしっかりやり遂げた。

○紙芝居の読み合わせ、三線・琉舞などの練習で、上手な人から教えてもらったり、協力し助け合う場面が見られた。

○発表するときのまとめや紙芝居の語りをコンピューターを活用して作成していた。

○発表段階でもコンピューターやプレゼンテーション用のソフト、パワーポイントを活用して発表し情報活用能力が高まった。

○発表でより効果的に伝えるために、いろいろと表現を工夫して積極的に挑戦していた。

○各班が楽しんで発表することができ、自分の出来栄を自己評価していた。

○各班の発表に興味・関心を持って集中して聞くことができた。

○孤立しがちな生徒が、班編成せず一人で課題に取り組んだが、一番集中して取り組み仕上げ発表までしっかりやり遂げた。

<改善すべき点>

○調べ学習の時間が十分確保できず、放課後や休憩時間を利用しての無理な計画となった。

○調べ学習の時間確保が不十分なため、取り組めない人がいた。

○2・3人の生徒が自分のテーマと違う課題に取り組むことになり困惑する場面があった。

○課題解決学習の計画の立て方・進め方の手順について指導者がしっかり把握する。

○調べ学習の時間や発表の練習時間を十分確保する。

○テーマの作り方とグループ編成について研究する。

VII 結果と考察

(1) 基本仮説についての検証

本研究は、基本仮説として「地域教材を活用した問題解決的学習において、自らの興味・関心に応じた課題を設定し、各過程において地域人材の活用を工夫することにより、地域の方の方言や文化に対する深い愛情や後輩を育てようという熱い想いに触れ、最後まで意欲的に学ぶことができるだろう。」を設定した。

検証授業を通してわかったことは、地域人材を活用することにより生徒の興味・関心を引き出し生徒の学習意欲が喚起されるということである。人との出会いや交流を通して心が元気になっていくように思われた。つまり教師とゲストティチャー（地域人材）の郷土文化に対する想いと生徒たちに託す願いが一致し、連携がうまくいくことにより、生徒も安心感を覚え「やってみよう」「できそうだ」という気になるのである。

今回、地域の言葉や文化に造詣の深い宮城カツエさんを課題に気付かせるための「文化講演会」におけるゲスト・ティチャーとして招聘した。さらに課題作り・調べ学習、まとめ（連ねの歌い方・琉歌・紙芝居での方言指導等）・発表会までかわっていただいた。さらに、生徒たちは授業の発展として地域のミニ・ディサービスを計画し、地域のお年よりのため「方言による民話の紙芝居上演」「三線演奏」など地域のボランティア活動に取り組むことができた。生徒たちの学習に地域の人材が関わることとは、生徒たちに大きな影響を与えるということをあらためて実感した。

また地域の言語や文化の教材化は、生徒の興味・関心を引き出すのに有効な教材であり授業に対する意欲が感じられた。地域の文化や言語に目を向け単元を構成したことは、一応の成果が得られたように思う。さらに生徒の特性に合わせて多様な学習が

展開でき、選択教科のねらいも達成できたと思う。

(2)作業仮説についての検証

＜作業仮説1＞生徒の想いや願いを起点として選択国語の授業を行うことにより、自ら課題を追究し、学ぶ楽しさを味わうことができるであろう。

作業仮説1の検証：授業後のアンケートでほとんどの生徒が楽しく学習できたと答えている。それぞれの課題を意欲的に追究し、新しい発見や学びの深まりが見えた。

（生徒の感想）

A子：私は琉歌について調べるまでは、琉歌のことは何一つ知りませんでした。しかし調べていくうちに、こんな短い中に自分の気持ちを歌うことは、とてもすごいことだと思いました。

B男：やっぱり調べただけあって関心が高まってきた。自分で調べた「かぎやで風節」や「誉められ誹りや」の歌を聞いた時はたぶん感動するだろう。

＜作業仮説2＞調べたことをまとめ発表するという過程（プロセス）において自分なりの表現を工夫することにより、調べたことを発表したいという意欲が喚起されるであろう。

作業仮説2の検証：コンピューターやパワーポイントを活用してプレゼンテーションすることにより、これまであまりやる気なかった生徒も学習意欲が湧き、生き生きと学ぶ姿が見られた。また琉歌を三線に載せて歌ったり、琉歌を朗々と「連ね」で表現したり、自分の好きな琉舞を積極的に披露したり、紙芝居の台詞をうまく方言で話すために上手な生徒から習ったり、方言ニュースを学級担任に事前にインタビューして記事にまとめたり、難しい方言を家族の協力を得ながら訳したりと意欲的に学習に取り組んでいた。生徒の想いを尊重しながら表現を工夫させることが意欲の喚起につ

ながると確信した。

＜作業仮説3＞実際に方言を話すという体験を通して、方言に対する理解と方言を大切にしようとする心情や態度を育成することができるであろう。

作業仮説3の検証：これまでは簡単な誰ものが使う言葉を方言と思っていたようだが、今回の学習を通して、生徒は本物の方言に触れ、難しいけれどこれからもっと学んで家族と話したいと思っている。また方言は世界に一つしかない言葉ということ、他のグループの発表から知り、大切にしたいと考える生徒が出てきた。今回、ことわざなどで方言の中にあるすばらしい知恵に触れ、もっと知り、自分の生き方に役立てたいという感想も出ていた。真剣な学びの中から単なる方言の面白さだけではなく、方言の価値を捉ええることができたと思う。

＜作業仮説4＞学習過程をポートフォリオにまとめていくことにより、自分の課題解決の道筋がわかり、自己実現を図ることができるとともに、地域文化を尊重し継承していこうとする態度が育成できるであろう。

作業仮説4の検証 今回は、8時間という短い時間での単元指導計画になり、ポートフォリオについてその効果を発揮するような、周知徹底した指導ができなかった。自分自身もこのポートフォリオの活用は、初めてだったのであせりもあったように思う。しかしこのような評価方法があるということ、を少しでも理解させられたことは、これからの学習にきっと役に立つと思う。

Ⅵ 研究の成果と今後の課題

1 成果

(1)「問題解決的な学習」の方法や手順・教師の支援のあり方などについて知ることができた。

(2)この研究を通して、地域人材活用の意義や方法について理解することができた。

(3)地域の言葉や文化の教材化を通して生徒の学習意欲を引き出すことができた。今後も国語指導・学級指導のなかで大いに生かしていきたい。

(4)生徒とともに授業に取り組む中で、生徒の自分を表現したいという意欲やチャンスがあれば自分を伸ばしていきたいというパワーを感じ、生徒一人一人に対する理解が深った。

(5)教科指導の中でコンピューターを積極的に活用することにより、生徒の情報活用能力が高まった。

2 課題

(1)今後も沖縄の文学や言葉・文化についての研究を継続し、地域に根ざした教育を追究していきたい。

(2)生徒一人一人に対応できる教師の姿勢や技能について研鑽を積んでいきたい。

3 終わりに

宜野湾市立教育研究所での半年間の研修期間は私にとって貴重な体験となりました。本当にいろいろな意味での学びの期間でした。4月は、生徒の心に対応できない悩み、授業改善の悩み、新教育課程への対応、情報化への対応、現代の教育の課題等、たくさんの課題を抱えて入所してきました。あれからいろいろな方に出会い、いろいろ学ばせていただきました。

本研究を進めるに当たってご指導くださいました中頭教育事務所の安里直子指導主事、当研究所の普天間朝光所長、研修係長の新垣英司先生、コンピューターについて教えてくださった比嘉安彦先生、照喜納良隆さん、若葉教室の指導員、教育相談の先生方、地域人材・ゲストティーチャーとして、献身的に研究に力を貸してくださった宮城カツエさん、玉那覇昇さん、皆様に深く感謝申し上げます。

また、研究の機会を与えて下さった嘉数中学校の上原正敬校長、研究所への入所を勧めて下さった小川進教頭、検証授業等で

いろいろ協力して下さった嘉数中学校の職員、そしてともに切磋琢磨しつつ励ましあった18期研究員の先生方、衷心より感謝申し上げます。本当に有難うございました。

<主な引用文献・参考文献>

- ・ 吉屋松金著『実践うちなーぐち教本』南洋出版,1999年.
- ・ 郷土の文学編集委員会編『わかりやすい郷土の文学』沖縄時事出版,1987.
- ・ 鈴木敏恵・小田勝巳著『未来教育に“ポートフォリオ”を活かす』教育新聞社,2000.
- ・ 鈴木敏恵著「ポートフォリオで評価革命」学事出版株式会社,2000.
- ・ 佐藤学著「授業を変える・学校が変わる」株式会社小学館,2000.
- ・ 河野庸介・相沢秀夫編著「新中学校・新教育課程講座」株式会社ぎょうせい,1999.
- ・ 河村潤子・藤田和光編著「新中学校・教育課程講座」株式会社ぎょうせい,2000.
- ・ 多田俊文著「授業におけるイメージと言語」明治図書出版株式会社,1986.
- ・ 文部省 中学校学習指導要領(平成10年12月)解説-国語編-東京書籍株式会社,1999.
- ・ 生田孝至・吉崎静雄・藤岡完治・中村紘司編著「教育実践額講義テキスト」遠隔教育振興会,2001年.

